第四章 人々の認識と生態学的知見からみた樹木

第Ⅱ部の冒頭に、削りかけを構成する基本的要件として、樹木であること、選択された樹種であること、人為を加えることの三点を挙げた。前章までは、削りかけが樹木であること——樹木をめぐる観念や具体が削りかけ習俗の重要な構成要素であること——を論じてきた。そのことは三章でみたように、特定の樹種の選択という行為を通してもっとも明確に顕われていると言ってよい。そこで四章で、削りかけというモノ、コトを成り立たせる要素として挙げた樹種の選択について、さらに詳しく論じていきたい。

なぜ特定の樹種が選ばれるのかという問いは、なぜ、どういった背景で削りかけという存在がそこに生みだされるのかという問いでもある。その問いは、ここでも本質論的なものではありえない。つまり、選択される樹木の聖性、呪性といったものがそこに存在するから選ばれるものではなく、それは関係性のなかにおいて選択されるものと捉えたい。その関係性とは、ここでは人と樹木（自然）との関わりである。したがって、その関わりの在り方を明らかにすることが本章以下の課題となる。そうした関係性を浮きあがらせることによって明らかにしようのは、「原初」の時においてなぜその樹種が選ばれたか、ではない。なぜ、どういった関わりのなかにあって、いまその樹木が選ばれているのか、あるいは、選ばれ続けているのか、である。

そこで四章ではとくに生態学的な視点を援用しながら、人と樹木のどういった具体的関わりのなかで特定の樹種が選ばれるのかをみていく。五章では樹木をめぐる民俗的な事象——樹木の名づけの民俗を取り上げ、検証したい。名づけという行為、また、その名前そのものが、人々の心意あるいは観念世界の表象であると捉え、その検討を通じて、より抽象的あるいは無意識的な関わりの在り方を描くことを試みたいのである。

四章では樹種選択の背後に関いだすことのできる人と樹木との関わりを示す。Ⅱ——一章で先行研究を挙げて示したように、その関わりは、人間・樹木の双方が主体的な存在とし
て関わるような在り方として描かれるかなければならない。そこでまず、第一節で人間から樹木に向けられる視点を検討する。ここでは、フィールドにおける語りを通して、人々の樹木に対する認知を考察することを試みる。ただしここで扱うのは樹木に対する抽象的な認識論ではない。むしろ具体的で体系化されていない、樹木に対する即物的な語りの断片である。一方、樹木の側の「土体性」を描くには、生態学的な視点を用いることが有効であろう。その一部である第二節、生態学的視点を援用しながら、できる限り樹木からの視点に接近してみたい。第三節では両者の視点を重ねあわせることでみえてくる関わりの在り方を描き、そうしたなかにあっていかにして樹種が選択されるのかを論じていく。

なお、これまで確認してきた通り、削りかけの材となる樹種は、落葉広葉樹群（小正月や春彼岸の削りかけ）と針葉樹群（紀伊山地のケズリバナ）に大別される。両者は樹木の物理的、生態学的性質の点で大きく異なっており、その差異は造形の違いとして明確に観察されている。このうち本研究では、とくに地域的広がりがあり、検証材料の豊富な小正月や春彼岸の削りかけにみられる樹種群を中心に扱うことで、より具体的な検証を行なうことを試みたい。ただし必要な観所では紀伊山地のケズリバナの材についても言及することにする。

ところで、削りかけの材として選択されるような樹種群、あるいはそれとよく似た生態学的・物質的性質を持つ樹種群は、とくに小正月のそのほかの儀礼においてもしばしば用いられることがわかっている。たとえば、マユダマやダンゴキなどと呼ばれ、木を飾るダンゴを飾りつける習俗が列島上に広く見出せるが、ここで選択される木は、東日本ではミズキ科のミズキ（ミズキが圧倒的だがヤマポウシなども散見される——がもっとも広くみられ、ほかにヤナギ類など、削りかけに選ばれる樹木と重なりあうものが少なくない。そこで本章以下では削りかけに用いられる樹種をめぐる諸事象を中心に扱いながらも、より詳細に論じるために、小正月にみられるそのほかのツクリモノに用いられる樹種にも視野を広げて検討していきたい。
第一節 人々の樹木認識 —フィールドワークから

ヌルデ、ヤナギ類、ニワトコ、ミズキ、イスピラ、アカメガシワ、ホオノキ、クルミ類、
キブン、コンアブラ、これらの樹木を人々はどのようなものとして捉えているのかどうか。
そうした認識は直接の聞き書きによって知ることがもっとも有効である。筆者はフィールドワークのなかで、
樹木に対する認識についても尋ねるよう心がけてきた。その聞き書き資料のなかから、樹木の特徴として語られる事柄を列挙したのが表aである。これでは、
その樹種に削りかけのほかに用途はあるか、どういった場所に生育する木か、どのような
特徴を持っているのかなどといった質問に対する応えであるが、結論から言って、これら
の樹種に対する認識には高い共通性がみられるといってよい。

こうした認識は人々の具体的観察に基づかれるものであり、当然、次節で確認する
ような生態学的知見とも大幅に合致する。ただし、その樹木を認識する際に、とくにどの
ような点に注目しているのかを知ることが、ここでは重要である。たとえばヌルデは、表
皮を傷つけると白い樹液を生じる性質があり、それがヌルデの特別視を形作る要素のひとつ
であるとも指摘されてきた [たとえば 渡辺 二○○七]。しかし、削りかけ材に限って
言えば、その点が言及されるのはほとんどなく、むしろ白さや柔らかさが語られる。こ
うした人々の語りは、なぜその樹木なのかといったことを考える際の一助となるだろう。
以下、先行報告も加えながら、人々の語りを通して樹木に対する認識をみていくことにし
たい。

(1) 材に対する認識とその周辺

はじめに材についての語りを挙げておく。材の評価としては、白い、柔らかい、あるい
は水分が多いといったものが目立つ。白さはミズキやヌルデ、コンアブラなどについて語
られている。事例 27の東秩父村ではミズキやヌルデのほか、地域によってマメブシ（和
名キブシ）なども使われるが、礫田博安さん（昭和一○年生まれ）によればそのなかで木
肌がもっとも白いのがミズキであり、事実、その差は歴然としている（写真1）。柔らかい、
<table>
<thead>
<tr>
<th>地域</th>
<th>トクリモノの名称</th>
<th>種樹名</th>
<th>適材</th>
<th>生育場所と状況</th>
<th>木の性質と利用</th>
<th>伐採にまつわる</th>
<th>現状</th>
<th>調査年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>角館町雲然</td>
<td>ポンデシコ</td>
<td>コシナブラ (コシナブラ)</td>
<td>岩木、直径2cm</td>
<td>山</td>
<td>白い木</td>
<td>秋、降雪前に伐る</td>
<td>最近はあまり見つかれない。また、伐採するため木が太くなってしまって使えない</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>秋田市太平黒沢</td>
<td>ポンデシコ</td>
<td>コシナブラ・ヤマウリノシ</td>
<td>木の幹</td>
<td>山</td>
<td>白い木</td>
<td>秋、降雪前に伐る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>西木村松木内</td>
<td>ポンデシコ</td>
<td>コシナブラ (コシナブラ)</td>
<td>木の幹</td>
<td>山</td>
<td>白い木</td>
<td>秋、降雪前に伐る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>久慈市山極端</td>
<td>インド</td>
<td>オニูリ (オニウリ)</td>
<td>1年生の木</td>
<td>山</td>
<td>白い木</td>
<td>秋、降雪前に伐る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>久慈市央部町</td>
<td>インド</td>
<td>オニウリ (オニウリ)</td>
<td>木の幹</td>
<td>山</td>
<td>白い木</td>
<td>秋、降雪前に伐る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>川村村小国</td>
<td>インド</td>
<td>オニジケ (オニジケ)</td>
<td>木の幹</td>
<td>山</td>
<td>白い木</td>
<td>秋、降雪前に伐る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>一関市花之原</td>
<td>ヒビノカ (ナナカマド)</td>
<td>オンシケ (オンシケ)</td>
<td>木の幹</td>
<td>山</td>
<td>白い木</td>
<td>秋、降雪前に伐る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>一関市川崎町</td>
<td>ヒビノカ (ナナカマド)</td>
<td>オンシケ (オンシケ)</td>
<td>木の幹</td>
<td>山</td>
<td>白い木</td>
<td>秋、降雪前に伐る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>登米市津山町</td>
<td>ヒビノカ (ナナカマド)</td>
<td>オンシケ (オンシケ)</td>
<td>木の幹</td>
<td>山</td>
<td>白い木</td>
<td>秋、降雪前に伐る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>登米市登米町</td>
<td>ヒビノカ (ナナカマド)</td>
<td>オンシケ (オンシケ)</td>
<td>木の幹</td>
<td>山</td>
<td>白い木</td>
<td>秋、降雪前に伐る</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>府県</td>
<td>市町村</td>
<td>林種</td>
<td>予定年次</td>
<td>位置</td>
<td>他害予防対策</td>
<td>伐枚数</td>
<td>原木利用様式</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>-----</td>
<td>-------</td>
<td>------</td>
<td>---------</td>
<td>-----</td>
<td>-------------</td>
<td>-------</td>
<td>------------</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>宮城県</td>
<td>仙台市岩切</td>
<td>ケシリバナ</td>
<td>コシアブラ</td>
<td>4年生</td>
<td>日直日陰関係なく、高い所にある</td>
<td>柔らかく乾いても割れず、節がないため削りやすく、白い、芯がある木で、ここにツゲを植えるのでまず気のある木でないといけない。</td>
<td>秋、雪前の前</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>05年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>山形県</td>
<td>山形市</td>
<td>ホタルデル</td>
<td>ホオノキ</td>
<td>直径1〜2cm</td>
<td>山中にたくさんある</td>
<td>身近な木で、柔らかい木なので何にしても変わりない木だが、乾燥してしまい、悪んじない。かつては正月用の火摺りを作ったのがある。</td>
<td>秋、雪前の前</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>04年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>新潟県</td>
<td>新潟市山田</td>
<td>ユズイクの木</td>
<td>オオノキ</td>
<td>直径5〜6cm</td>
<td>伐ると根本からたくさん生えてくる</td>
<td>根にするとできて乾燥するので好む。葉は利用せず、材が乾いたのでは、オオノキの木は後に機能を発揮し、葉をつけるからスプレーをすることで、葉が出るようになる。</td>
<td>---</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>04年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>北海道</td>
<td>カツラ</td>
<td>シロカマリ</td>
<td>直径1〜3cm</td>
<td>綿の木を使用</td>
<td>山中に挿ち込む、太さまで成る</td>
<td>柔らかく、白い、肌の木に木を用いる</td>
<td>---</td>
</tr>
<tr>
<td>03年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>群馬県</td>
<td>関川</td>
<td>ケシリバナ</td>
<td>オオノキ</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>03年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>羽黒木手前</td>
<td>ケシリバナ</td>
<td>カシノカミ</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>03年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>寒河江市村</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>04年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>中川</td>
<td>ケシリバナ</td>
<td>シロカマリ</td>
<td>直径5〜6cm</td>
<td>若木の際に</td>
<td>スポーツフィールで10分くらいの山で、柔らかくて乾燥しやすく、無理に生えます。松の木を乾燥させると自然に生え、よく適応する木茲を目安に生える。</td>
<td>生長が早いわけではないが、一年で一本抜ける。この一番から男根様を木にする。</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>04年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>室生</td>
<td>ケシリバナ</td>
<td>シロカマリ</td>
<td>直径3〜4cm</td>
<td>メテオの木</td>
<td>季節毎に抜ける。その役にも立たない木にして無理に抜ける。葉も乾燥させると無くなるので生長のまま抜ける。</td>
<td>当日限りで抜ける</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>03年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>六合村</td>
<td>ハナメルス</td>
<td>ケシリバナ</td>
<td>直径2〜3cm</td>
<td>岩木の際に</td>
<td>早いうちに抜ける。手に一本ずつ、ねえぐいふくです。木に乾燥させ、また新しく育て、抜くと抜ける。</td>
<td>秋、雪前の前</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>05年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>六合村</td>
<td>ハナメルス</td>
<td>ケシリバナ</td>
<td>直径3〜4cm</td>
<td>岩木の際に</td>
<td>早いうちに抜ける。手に一本ずつ、ねえぐいふくです。木に乾燥させ、また新しく育て、抜くと抜ける。</td>
<td>秋、雪前の前</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>05年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>六合村</td>
<td>ハナメルス</td>
<td>ケシリバナ</td>
<td>直径8〜9cm</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>05年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>片品村</td>
<td>ハナメルス</td>
<td>ケシリバナ</td>
<td>直径8〜9cm</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td>---</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>地域</td>
<td>所在地</td>
<td>木名</td>
<td>通常成長日</td>
<td>生育場所と性状</td>
<td>树木に対する認識</td>
<td>伐採に当たる理由</td>
<td>現状</td>
<td>調査年</td>
</tr>
<tr>
<td>--------</td>
<td>--------------</td>
<td>---------------</td>
<td>--------------</td>
<td>----------------</td>
<td>------------------------------------------------------------------------------</td>
<td>----------------------</td>
<td>-------</td>
<td>--------</td>
</tr>
<tr>
<td>24</td>
<td>片品村</td>
<td>ハナ</td>
<td>山中にたくさんある</td>
<td>赤いのでハナを伐ることをアカボサ伐りといった。子どもは、ハナの枝を枝で引く張りをした。</td>
<td>1月2日の出始めで伐る</td>
<td>木の色が美しい。</td>
<td>1月2日の出始めで伐る</td>
<td>05年</td>
</tr>
<tr>
<td>25</td>
<td>足島村</td>
<td>ハナ</td>
<td>日煇の乾いた場所にあたる</td>
<td>種を拾い、天日に当てて乾燥させ、洗って干して食用</td>
<td>木の色が美しい。</td>
<td>種を拾い、天日に当てて乾燥させ、洗って干して食用</td>
<td>玉米か種子で育てられる</td>
<td>05年</td>
</tr>
<tr>
<td>26</td>
<td>小鹿野町</td>
<td>アサポのほか</td>
<td>ヤクザが木で簡単に生態、繁殖率の高い木</td>
<td>加工しやすい木、たんに燃料にすればはねて始末が済む、ならお度の悪さになるのでなるべく絶やすようにしたい、ある木</td>
<td>吉代に伐る</td>
<td>木の色が美しい。</td>
<td>吉代に伐る</td>
<td>03年</td>
</tr>
<tr>
<td>27</td>
<td>埼玉県</td>
<td>ハナ</td>
<td>モデレ（オッカド）</td>
<td>森中に多く見られる</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>03年</td>
</tr>
<tr>
<td>28</td>
<td>東栄村</td>
<td>ハナ</td>
<td>スルデ（オッカド）</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>03年</td>
</tr>
<tr>
<td>29</td>
<td>安村村</td>
<td>ハナ</td>
<td>スルデ（オッカド）</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>04年</td>
</tr>
<tr>
<td>30</td>
<td>梨木村</td>
<td>ハナ</td>
<td>スルデ（オッカド）</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>02年</td>
</tr>
<tr>
<td>31</td>
<td>静岡市</td>
<td>ハナ</td>
<td>スルデ（オッカド）</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>03年</td>
</tr>
<tr>
<td>32</td>
<td>熊野市</td>
<td>ハナ</td>
<td>スルデ（オッカド）</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>木肌は半透明で、柔らかく削りやすい。1日が3節で削り、その3節で削る。</td>
<td>07年</td>
</tr>
<tr>
<td>番号</td>
<td>町名</td>
<td>種類</td>
<td>名称</td>
<td>直径15cm</td>
<td>家の近くに植えていた</td>
<td>特に決まりなし。乾燥させないで削る</td>
<td>最近見かけなくなった</td>
<td>調査年</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>---------------</td>
<td>--------</td>
<td>-------</td>
<td>-----------</td>
<td>---------------------</td>
<td>---------------------</td>
<td>---------------------</td>
<td>--------</td>
</tr>
<tr>
<td>33</td>
<td>伊集院町上土橋</td>
<td>ケズイケケ</td>
<td>ネコヤナギ（インノコジュ）</td>
<td>家の近くに植えていた</td>
<td>田に流れ込む小川によく生え、根付のよい木</td>
<td>家の庭にあるので特に伐る日は決まっていない</td>
<td>県</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>34</td>
<td>伊集院町清藤</td>
<td>ケズリケ</td>
<td>ネコヤナギ</td>
<td>元をケズリケ、中をバガマ槌、クラを落</td>
<td>川のようにすぐにあった</td>
<td>川のようにすぐにあった</td>
<td>県</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>35</td>
<td>鹿児島県</td>
<td>ケズリケ</td>
<td>ハマレ棒、家</td>
<td>元をケズリケ、中をバガマ槌、クラを落</td>
<td>川のようにすぐにあった</td>
<td>川のようにすぐにあった</td>
<td>県</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>36</td>
<td>伊集院町伊集</td>
<td>ケズリケ</td>
<td>ネコヤナギ</td>
<td>元をケズリケ、中をバガマ槌、クラを落</td>
<td>川のようにすぐにあった</td>
<td>川のようにすぐにあった</td>
<td>県</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

※市町村名は、調査当時のものを使用した。
あるいは削りやすいといった認識も、ミズキ、ナルデ、ニワトコ、コシアブラ、ヤナギ類、ホオノキなどについて語られるが、とくに細かいか割りを施すためには必要な条件である。こうして認識される性質に関わっていると考えられるのが木の「シン」である（写真2）。これはいわゆる茎の中央部に存在する柔細胞から成る組織（鞣・pith）のことで、宮城県仙台市で春彼岸の削り花を作る伊藤栄吉さん（大正一三年生まれ）の観察によれば、シンのある木はどれも材が柔らかいという。この部分に竹や木の枝を押して固定することが多いため、シンのあることがその樹木の選択理由だと考えられることもある。

こうした評価はどちらかといえば肯定的なものであるが、表裏する消極的評価として、これらを価値のない木、役に立たない木とする語りが広く聞かれることは注意すべき点である。表ではナルデ、コシアブラ、ニワトコ、ミズキ、アカメガシワ、ホオノキなどについて語られているが、とくにナルデはその代表で、ヤクサな木（事例26）や能無しの木（事例31）などと酷評される傾向にある。役に立たないことの具体的説明としては、薪にすらならないというもののがどの地域でも常套句で、薪になるか否かが、樹木の最低限の有用性を判断する基準のひとつであったことがある。こうした評価は樹木の物理的特性の一端を反映したものと言え、もちろん認識主体である人々の判断にすぎず、当然、これらの木を有用とみなす地域もある。たとえば山形県温海町（現鶴岡市）関川（事例15）ではホオノキは重要な木で、その材も葉も重宝したという。しかしその一方で、わずか一〇分ほど車を走らせた傾向の山北町富（事例12）では、ホオノキは柔らかい木で、ホウダル（と呼ばれる削りかけ）のようなものにでもしなければ何にもならない木だと語られる（木村 幸さん、大正九年生まれ）。こうしたことは、役に立たないという評価が実際に恣意的なもの
であることを示す好例と言える。実際、悪木の代表のようにいわれるヌルデも、虫が寄生して作られる虫ごぶから採取される五倍子が、タンニンの原料として、医薬や染料、またお酒黒の原料などに重用されたことは駿に知られている。しかしたとえばお酒黒にしてのも、その産地の中心は鳥取、山口、愛媛、和歌山の諸県であり（平井一九九六三九六）、
削りかけにヌルデを用いる地域とほとんど重ならないことは注意されるべきであろう。つまり、ここではこれらの木が実際に有用性を秘めているか否かではなく、これを用いる人々が役に立てないと口をかぞえて語る点がかえって重要なのである。

役に立たないという認識と相まって語られるのが、これをどこからでも採ってきよく良いとする伝承と、日常の用には使わないとする伝承である。表ではコシアブラやニワトコ、ヌルデなどについて語られているが、II一二章でも触れたように、それは役に立たないからという理由によって説明される。山梨県丹波山村（事例30）では、オッカドの木（和名ヌルデ）はどこからでも伐ってよいと言われた。年数が経つと枯れてしまう木だし、薪にしても損ねて仕方ないので何の役にも立たず、これを伐っても誰も文句を言わなかったのだ（田中重夫さん・二〇〇三年一月当時八十五歳）。同村小舎の酒井徹雄さん（大正一一年生まれ）も重要な木でもないため小正月用にどこから採ってきてもよいと言うが、逆に日常においては昔から拾うなど教えられたという。やはり重要な木でないからというのがその理由だという。静岡市の有東木（事例31）でも、アーポノキ（和名ヌルデ）を使い道のない能無しの木で、小正月にはどこから採ってきても文句を言わないが、ツクリモノにだけ役立つ木だといって他に用いることはしない（宮原幸平さん、昭和八年生まれ）。

このように日常の役に立たないから小正月などにしか用いないとする説もある一方で、より積極的に、これらを祝い事に結びつける場合もある。たとえば東秩父村皆谷（事例27）では、ミズクサ（和名ミズキ）を何もならない、役に立たない木としながらも、一方では新家が建てなる際、屋根の棟木に縁つなけ、「祝いもののに」「祝いの木」とする。先に例を出した山北町薗（事例12）でも、ホノノキは「お祝いの木らしい」、という感覚が語られる。かつてはホウダルのほかにもホノノキで火箸を作り、元日の朝に用いた。こ
の日は鉄の火箸を使ってはならないとされていたからである（前出、木村さん）。峠を越えた温海町関川では、先もみたとおりホオノキは有用木であったが、「迎えものの木だけはどこでも試してよい」といわれ、どこから採ってきてもよいことの正当性が「祭りの木」という性格によって保障されていた（五十嵐勇喜さん、昭和一〇年うまれ）。

以上のように、樹木の材に対する語りは、白さや柔らかさ、あるいは祭りの木だという肯定的評価と、日用の役に立たない無用の木だという否定的評価のふたつが同時に存在することがわかる。

(2) 生態に関する観察

次に、これらの樹木の生態に関わる人々の観察をみてみたい。まずもっと話されるのは生命力の強さに対する関心で、たとえば生長が早い、紅葉が美しいあるいは早いなどの視覚的にわかりやすい要素が語られる⑤。表のなかで生長が早いと語られているのは、ヌルデ、ミズキ、ニワトコ、ホオノキなどで、とくにニワトコやミズキは伐って放置しておいても葉や芽が出てくるほどだという⑥（事例8·15）。関連して語られるのが、これらが一年でスッと伸びる木であるということである。とくにふさやかな剣型の削りかけを作る場合には節のない木であることが必須条件であり、ミズキなどはそうした特徴がよく認識されている。

ヤナギについては根つきがよいことも語られる。鹿児島県伊集院町水藤（事例34）の松下節子さん（昭和五年うまれ）のお宅では、門のそばに植えた鉢植えにネコヤナギ製のケイラクラケとネコヤナギの芽をセットで植しておきが、ヤナギの芽がやがて根付くので、これを扇の隅に植え替えて翌年の材とするのだという⑦。一方ヌルデについては、その成長力や生命力の強さへの認識とは裏腹に、あまり大きく生長しないことも語られている（事例20·21·27·30）。これはさわち、用材とならないことを意味するといってよい。

芽吹きが早いというのも高い共通性をもって認識される事柄である。表の事例のなかでは聞くことができなかったが、自治体史等の報告には、ニワトコ、ネコヤナギ、ヌルデな
どについて、春一番に芽吹くとする認識が東日本から九州まで広く語られている。このように樹木の生命力をとりわけて認識し、語ることは、その生命力にあやかろうとする意志をとる人を増加することが多数。実際、

二章で触れただように、芽吹きが早いことを縁起のよいことと捉え、それゆえにこの木を用いるとする地域は広い。

生育場所としてはメルデやニホトコ、アカメガシワ、イヌガラは道路の緑や開田した場所、ヤナギは河川ベリや休耕田などに育つことがある。また、とくにヌルデは新しく土を反した場所や荒れた場所に一冊に生えることがある認識されており、生命力の強さを意識させせるためのひとつとなっている（注 3 の『開荒須知』も参照）。これらの木よりも、もう少し山に入った場所が生息地だと語られるのがコンアブラやミズキで、これらは雑木林もしくはスギの植生地で生えることが多くなると質がよいとされる。たとえば東秋真村、皆谷では、ミズキはスギ林などの、日陰をいくらか日の当たる場所に生育するものが柔らかくて適している、という。これらは皮が青ぼかいが、目向で育ったものは皮が赤く、堅いので適さない（前出、曇田さん）。ホオノキも里に近い山に豊富にみられる木と語られる。かつてはこの木の大きな葉でものを容むことも多く（註 2 も参照）、新潟県山北町雷（事例 12）の大満洋子さん（昭和一一年生まれ）は幼い日の思い出を次のような歌に詠んだ。

「ほおばる 木下にしのぶ おさなびの 母のみやげの 包みあれこれ」

ホオノキは生活に身近な、親しみのある木であった、という。

ここに登場する樹木群は、いずれも里や里山の近辺でしばしば見かける身近な木と認識されている。こうした身近さは、樹木に対する親近感を形成する基盤になったと想定されると共に、生命力の強さなどの特徴を目につきやすくさせるものであったろう。

以上のように、これらの木々に対する語りすなわち認識としては、しなやかな生命力や材の素直さ、白さに対する評価があり、また、身近な木であることが親近感をもって語られる。またこうした肯定的評価と裏腹に日用の役に立たないという否定的評価も語られる。こうした認識から、人々と樹木とのどのような関係性を捉えることができるだろうか。ここでの焦点は関係性であるから、それは二者——すなわち人と樹木——それぞれの視点か
第二節 樹木群の生態学的特性

生態学的援用ということであれば、ここにみられるような樹種群とその神聖性について、すでに植物の「先駆性」という概念を使っての説明が試みられている。すなわち、三国信一がアカメガシワについて、渡邉三四一がヌルデについて、その神聖性の根拠の一端を先駆種のもと生命の旺盛さに見出しているのである。【三国 二〇〇五 二五八～二五七、渡邉 二〇〇七 三一】。事実、削りかければ用いられるような樹木には先駆性を持つ樹種が多い。そこで、ここでは先駆種という概念をひとつの手がかりにしつつも、三国や渡邉のいう生命力の強さへの認識という視点から、人と樹木との関係性という視点に軸足をずらしながら検証していきたい。

ここであらためて先駆種について事典をめくると、それは「大規模な揺乱の後の、競争植生がほとんどない環境下で成立する陽性の樹種」とのことだという。ここに言う揺乱には山火事や地すべり、洪水などの自然災害もあれば、開拓、開圧など人為的なものも含まれる。「先駆」とは、すなわち植生の遷移系列における先駆性を指す。ある一定の空間の植生は、時間の経過とともにその空間的構造や構成種を変化させるが、その系列の初期に出現する樹種ということである。揺乱によって形成された開放地は、土壌が未発達であったり水分が不足していったりと環境的に整っていない。そこで環境に対する適応力が強く、初期成長の早い先駆種の樹種が、草本植物に次いで地表を覆うことになる。しかしこうした樹種はほかの植物に対する競争力が弱いため、やがて土壌が整い、耐陰性の強い遷移後期樹種が台頭し、極相林へと遷移していく過程で淘汰されていくことになる。

先駆種の一般的特徴としては、結実年齢が若い、大量の小さな種子を生産する、種子を広範囲に散布する、耐陰性が低い、成長し、とくに初期成長が早い、材の比重が軽い、密生成立する傾向が強い、寿命が短い傾向にあることなどが挙げられるという。こうした特性
をもつ植物群は、自然状態においては林縁部においてマント群落在形成する。つまり、開放地と森林の境にマントのように生えるのであり、宮脇昭の言葉を借りれば、「自然状態では、境界領域に生育して草本植物群落在森林がきないか際の尖兵の役割を果たしており、島状に前進基をを作る」（宮脇 一九七〇 一三〇）のである。[以上、井上ほか編 二〇〇三 一一八、日本林業技術協会 二〇〇五 五九三、福嶋編 二〇〇五 五一、宮脇 一九七〇 一九二九一三二]

さて、人間活動との関わりのかなで言えば、これらは新しく切り拓かれた土地や、そうした土地と林地との境（林縁部）、人の手が常時のに入る明るい二次林などの生態系を好んで生える木ということになる。一般に先駆種に数えられるヌルデ、アカメガシワ、キブシ、ニワトコ、ウツギ、オニグルミなどをはじめ、ミズキ、コシアブラ、ヤナギ類など割りかけに用いられる樹木は、こうした人為的に揺乱された生態系（人為的生態系）を好み、初期成長の早い樹種が多い。このほか、沢沿いによく見られるサワグルミなども成長が早く、渓谷林の構成種のかなでは先駆的な種とされる[高橋ほか監修 二〇〇〇 五一]。ホオノキはブナ林などにも生えるが、東北の山林を歩くと山道の端などでもよく目にする木であり、人里近くの明るい森にも好んで生え、成長も比較的早い。

こうした生態学的知見は人々の観察の結果ともよく合うする。たとえばヌルデについては、先にみたように新しく開いた土地や荒れた土地に一番に生えるといい、また逆に深い木立では他の木に負ける、と観察される（事例 20 など）。身近な木だという感覚も生態学的に根拠のあるものであり、これらの木は、人間活動との関係に限定して言えば、たまたま生活圏の身近に生えているのではなく、むしろ人に身近な場所こそ旺盛に生育するのである。用材とならず役に立たないというのも、比重が軽い（つまり強度がない）、寿命が短いために大きくなりないという生態学的な特性が直接に関係しているといえよう。

第三節 人々と樹木との具体的関係性 — 人為的生態系という視点から

こうした生態学的な事実と人々の認識とのずれあわせは、人と樹木との関わりの在り方
についてのいくつかの興味深い視点を与えてくれる。まず人間の側から見れば、その生命力に対する驚嘆と崇敬以外にもこうした樹木を選ぶ合理的な理由があったということである。これはは生活圏の身近に生育する木であること。生長も早くに材が比較的豊富に確保できる。しかしこの材といえば軽さであり、換材としては有用でないものが多い。さらにいえば、これらの木は雑木林や植林地などのわずかな林冠ギャップに——人間の側から言えば——勝手に生えてみられる繁殖し、有用木の生長をも阻害しうる。たとえば埼玉県小鹿野町長留（事例26）の笠原利雄さん（大正六年生まれ）は、オッカド（和名ヌルデ）はヤクザな木で簡単に生え、繁殖率も高い、ナラやクヌギなどの有用木の邪魔になるので伐って除きたい、なるべく絶やすようにしたい、と語る。事実、ヌルデをはじめ、ミズキ、ヤナギ、ニワトコ、コシアブラ、アカメガシワ、イヌビキなどはいずれも雑木林の除去材とされる木で、林冠ギャップ等に芽吹いて三五年から五年もすれば、林の主役であるコナラなどの幼樹を凌ぐ高さに成長してくるという（中川重男氏のご教示による）。身近でありながら日常的にはあまり用でなく、しかも生命力旺盛で一定数の確保ができる、また場合によっては林業や炭焼きの邪魔となるので除去する必要もある、そうした日常の役に立たない木を非日常の用い——祭りや儀礼に供する木として選ばるのは、いかにも合理的と言えるだろう。

また、人為的生態系を好む樹種ばかりが選ばれていることは、人為活動による自然への介入とそれに呼応する形での生態系の変化が、その選択の大前提としてあったことがわかる。ここにいう人為的生態系とは、人為による自然介入が継続的になされることによって維持される生態系のことで、たとえば縄文時代、青森県三内丸山の集落や周辺域も人為的生態系によって構成されていたことが考古学的成果から明らかになっている。この概念に含意されているのは、自然に対する人間の働きかけを肯定的に、あるいは必然として捉える見方である。そうした観点は、たとえば第Ⅱ部一章で挙げたようなあらたな環境倫理を模索するうえでも、自然を人間存在から切り離して保護を訴える従来の環境倫理を超えるための、思想的核になったとみてよい。こうした考えは、近年では里山に関する
一連の研究に結実している。里山は「人間が暮らしのために絶えず干渉を加え続けてきた結果として生み出された二次的自然（半自然）」と定義づけられるが（日本林業技術協会 二 ○ ○ 四），丸山德次によれば、これはすなわち「文化としての自然」である。丸山の提唱する「里山学」においては、「里山をながく維持してきた人々の関わりと文化がどのようなものだったのかを研究し、里山的自然との新しい関わりを探求する」ことを目指すとしている（丸山德次ほか 二 ○ ○ 七）。

さて、削りかけをこうした里山論の範疇で語ることができだろう。削りかけに用いるられた樹木のはほとんどは、里山のような人為的生態系を好む性質をもつからである。このことは次の二つの視点で示される。第一には、自然環境と人間との継続的な関わりの中においてこれらの木が選択されたということ、第二には、そうした関係性のなかにおいて、結果的に、削りかけを祭るという精神活動も守られてきたということである。炭焼きや林業、開拓や開催、薪炭材・刈敷・山菜・キノコの採集活動など様々な生業を通じて、人間が周囲の環境に意識的、無意識的に関与し、介入する、そのことによって人為的生態系が形成・維持され、その結果そこに進出してきた光獲剤の樹木を、削りかけなどの祭りに用いる。それは、単にそこに生育しているから用いるという消极的利用に留まらず、すでにみたように、より積極的に間引きや手入れも兼ねながら利用される場合もある。「里山学」をはじめ、近年の里山論のなかにおいては、自然への人為的介介入の具体的内容はもっとも生業活動——とくに農業——との関わりにおいて説かれており、精神活動との関わりはあまり論じられてきていない。たしかに、生業による大幅な人為介入に比べれば祭りの材の採取は微力な影響であるかもしれませんが、また副次的なものにすぎないかもしれない。しかし、削りかけなどの小正月の祭りに用いられる樹木のうちの多くが、人為的生態系を好む種であるという事実は、人間の継続的な介入と変革された環境の維持、といった里山のサイクルに、生業活動のみならず精神活動も組み込まれていたことを示すと捉えよう。生業活動と精神活動による生態環境への介入が入れ子細工のように噛みあいながら、総体として、また結果として、周囲の人為的生態系を維持するよう志向されていた、大局的に見
た場合にはそのように捉えることができるのはいないだろうか。樹木の側に視点を移して言葉換えたとすれば、祭りの木は人間（生涯活動と精神活動）と山との関わりの総体のなかで良好な生育環境を獲得し、選ばれてきたといえる。

ここまで先駆種と人為的生態系という概念を用い、小正月等の削りかけの樹種群との関わりについて整理を試みたが、紀伊山地のケズリバナの材であるスギ、ヒノキについてもこれと同様の観点で捉えることができるだろう。第一には、スギやヒノキが植林というきっかけによって人為的な活動を通して守り育てられるものであること、これらはより鮮明に「文化としての自然」である。また、小正月や春彼岸の削りかけが樹木の幹を使って作られることが多いのに対して、紀伊山地のスギやヒノキのケズリバナは基本的に枝を使って削られる。すなわち、いずれ枝打ちで落としてしまう不要な側枝を用いて作られるのである。日常生活には用途がなく無用な部位を非日常的用途に供するという構図は、小正月の樹種群との関わりの在り方と共通する。

さて、こうした関わりの在り方は、それが希薄化し、解体寸前となっているいま、むしろ顕在化している。たとえば昨今の材不足もそのひとつであろう。削りかけに用いる材が近年手に入りにくくなったと認識されていることは表にもみえている通りであり、また全国の自治体史のなかにも散見される[1]。材不足の要因をひとつに求めるとは妥当でないが、山に人の手が入らなくなり、こうした樹木の好む環境が減少傾向にあること、また行事が行なわれなくなって定期的な材の更新がならなくなってしまったことなどは要因として挙げられる。たとえば群馬県六合村小雨ではコメ哲等の水（和名不詳）でハナを作るが、市川義夫さん（昭和九年うまれ）によると、かつては炭焼きで木を伐ったため材がたくさん生育していたが、今は大きな木の下になって育たない、という。こうしたことは削りかけだけでなく、同じような性質をもつ樹種群を用いるほかの小正月行事に関しても聞かれることである。たとえば群馬県六合村荷付場ではヤマクワ（ミズキ科のヤマボウシと思われるも未同定）をマユダマの木に用いるが、中沢一孝さん（昭和九年うまれ）によれば、最近は山の手入れをしておらず、林間がなくなってきているために木が育たなくなっているという。
埼玉県東秩父村の皆谷でも、床の間に飾るマユダマはトリアン（和名ヤマボウシ）の木につけるもので、炭を焼いていたときは山がきれいで木も探しやすくかかったがいまは見つけるくなくなったという。篠田博文さん（昭和〇〇年生まれ）に伺った話だが、二〇〇二年に訪れたときにはトリアンがなく別の木を使っておられた。

行事が衰退したことでも生態系の変化を招いており、秋田県角館町でボンデンコを作るコシアブラも、宮城県登米市寺池でヒガンバナを作るカワヤナギも、製作者が減ったため適度な更新が行なわれず、材が成長しすぎて使えない状態にあるという（実然：村田武一さん、大正四年生まれ／寺池：松坂勝夫さん、大正六年生まれ）。こうした例によって、利用することによってこそ継続的に適材を確保することができたことがわかるのである。

材の確保が難しくなった理由としてもうひとつ挙げられるのは、生活のなかで山に入ることが減り、時間を使って適材を見つけることが困難になったことである。人々が材となる樹木を事前に見ておいたことはすでに-II－二章において触れられた通りであるが、生業形態の変化と共に、日常のなかで樹木に触れる機会が減ったことが、材不足の認識を強くするもうひとつの要因であったかと考えられる。

以上の変化は、いずれも人と自然との交渉が少なくなったり、関係性が変化したことにより起因するものであろう。そのことは、削りかけの材となる木が選ばれる背景において、人々の生業活動と精神活動、周囲の人為的生態系とが、相互に関係しあう総体として在るべく志向されていたという事実を逆説射するものといえよう。その関係が常にうまく機能していたか否か、またそこに価値を見いだすか否かは別としても、そこに具体的かつ実質的な関係が取り結ばれていたことをみることができるのである。

ここまで、樹種選択の背景にある樹木と人をめぐる関わりの一側面を示してきた。本章で明らかにされたのは、特定の樹種を選ぶことの合理性あるいは必然性である。くりかえせば、人々は白く柔らかいなどといった材質的な要因に加え、身近に比較的豊富にある、かつ日常の用にはあまり用いない、「役に立たない」木のなかから、祭りの木を選択してい
る。それは、たいへん極めにかった選択理由であろう。しかし、たとえばII－三章で確認したヌルデとツクリモノに見るように強い傾向の結びつきは、そうした合理関係だけで説明することはできない。用いる樹木は材質的な点や生態学的観点からいえば、ヌルデでなくミズキやヤナギであっても本来構わないはずだからで、まして、類似の性質を備えていながら削りかけの材にはほとんど選ばれない樹木——たとえばネムノキ、クサギ、ムラサキシキブなど——も数多くある。なぜそれぞれの土地でヌルデであり、ヤナギであり、ミズキでなければならないのか。それはもはや科学的解釈では説明のつかない、文化的領域に属する問いであろう。たとえこれらの樹木が選ばれたその原初の時ににおいて、その選択理由がきわめて合理的なものであったとしても、人々はそこに様々な意義つけをし、伝承を繋いでいくことで、これらの樹木をめぐる豊かな世界観を築きあげてきた。そこにみられるのは、より抽象的な樹木との関わりの在りかたである。そこで次節では樹木をめぐる民俗事象に眼をむけることにより、言語化されない人／自然の関わりの在りかたの一端を示し、なぜそこで特定の樹木が選ばれ続けてきたのか——削りかけというモノが生みだされたのか——を考察していきたい。
4 ほかにもたとえば、伊勢原市では「ミズキは薪には切らなかったが、大山独楽（こま）の材料となったので値が良く、いい木があると値って独楽屋に売った」という。なお、当地でダンゴを捕える木はニラやカシなどでミズキを用いることは報告されていない（伊勢原市史編集委員会 一九九四 五五六四）。

これに関連して、山田孝子はアイヌの例として次のことを指摘している。渋流・胆振地方のアイヌのうちでは、ドロノキは「ヤイ・ニ（ただの木）」と呼ばれ、神格化もされず、「役に立たない木の象徴」となっているという。しかし北海道北東部では、ドロノキでイナウを作れる地域、何度を造れる地域もあるという。材としての実用性や、使用価値や、利用価値が認められていることがわかる。すなわち「実用的価値は必ずしも経験的に確かめられたものではない」、ドロノキの場合は「火の創造神話」において、火を生み出す代わりに魔神を生み出てしまっている「精神の宝木」としての食品がある。「日常生活における評価を規定する場合にも認められる」例だという。こうした例から山田は、「植物の認識、植物観が彼らの世界観全体の枠組みとも切り離すことができないものである」ことを指摘している（山田孝子 一九九四 一四四）。

5 ヌルデの紅葉が早くことやその色の鮮やかさは、いくつかの近世史料にも記されている。たとえば文政三年頃の成立と推定される「佐渡誌」（伊能忠敬著）巻五の「顔魅子（ヌルデ、フリリ、ヌマバ）。の項には「春雨を至り甲ノ紅葉シ」などあり（安福編 一九九九 一〇四）、一八世紀後半の『肥前県志』九十一には、「五倍子の」「葉ハ秋紅ヒナリ」とある（愛知県郷土資料刊行会 一九七七 七四一）。このことは生態学的にも興味深いである。たとえば小林正明は「ヌルデの紅葉はヤマウルシと共に黄から赤のきれいな色で、他の植物より早くが多い。このきれいな色になるのは10月中旬で、落葉は10月下旬から始まり、11月中旬には全部落ちる」としている（小林 二〇〇二 八七）。

6 ニワカの形については前出でも照らし、このほかなすなどについても、「来実をかへて縁起のいいものとされている。この木は一年に六尺（約一・八メートル）以上伸びる」などの認識が語られている（林義明 一九九四 二四六）。

7 こうしたことは自治体史にも報告がある。たとえば大分県米水津村では「一月十五日 新しく柳の木で箸を作って使う。使い終わった箸は庭にしておくと芽が出る」などとされている（米水津村誌編さん委員会 一九九五 七三九）。また長野県下で苗子にヤナギを立てる風習が広がり、それが根付くことを吉兆とすらいう習が各地で報告されている。たとえば飯田市では次のようにあった。「苗間で代休ををして庭の木を平らにならすとき、苗田の中央に『苗ぼ』という長さ三〇センチメートルくらいの柳の枝を三本、ほどよく間隔をとってそして置く。これが苗の一五センチメートルほどに伸びるころは白根が生え芽が成長する、この新芽の勢よく伸びるか否かで苗育ちの状態を判断したとされている」（原村 一九九三 一〇四）。

8 宮本常一は、根つきやすいことを神社の条件のひとつに数えている。たとえば「柳は樹木をしても根をおろす成長する木であった。杉をまた枝を折って根つけやすく、そういう木が神木としての条件になっている。」（宮本 二〇〇三 二九九）とあり、あるいは「つつきを木口にたてて豊作を祈ったのは、つつきはたいへん活発に木であったことも原因があると思う」（同前 一九二）などと述べている。なお、アイヌの人々もヌサに立てたヤナギが根つけ、あらたに成長することを吉兆とする習がある。これについては一 一 一 一 一中 12 で触れることである。

8 三国信一は次のように述べる。「なぜアカメガシワの葉を用いるのか、繰り返すが、調査地域においてアカメガシワは日常生活によく有用な植物ではない。実を食べることもなく、薪にもならない。材木としての利用も聞かない。では、どこで人々の暮らしの接点があったのか。林将之によ
ところで、アカメガシワは先駆性植物（バイオニアツリー）であるという。···（略）···その先駆性は人々が切り開いた場所で発見されてきたものである。真っ先に生えてきて、あっという間に樹木になる。しかも、日当たりさえ良ければばやせた土でも育つ。その生育力は大いなチカラとして認識されたものだ。「三国　二〇〇五　二〇六～二〇七」

三國は、こうした驚異的な生命力に加え、葉柄の赤い色、稲穂を連想させる花など視覚的な印象が、人々としてアカメガシワが選択されたのではないかとする。一方渡邉は、小正月のモノクロの素材が「木肌が白く離れやすい樹木で、また根付きやすく成長が早くなった木」が多いことを挙げたうえで、「その中でヌルデが優位にあるのは、群を抜く成長力であろう」とする。また輪作を終えた焼畑地にハシノキと共にフィスノキ（和名ヌルデ）を移植する例を挙げ、「関東地における二次林の回復は安定した焼畑経営の要訣であり、それを支えたのがヌルデを代表とする先駆樹種（マント群落）であった。ましてや雑木の自然成長によって廃絶した古代の焼畑耕作を考えるとき、ヌルデの目覚ましい再生力に特別の神秘感を抱くのは、むしろ自然の成り行きであろう」と述べる。なお渡邉はこうした生命力のほかに、切り口から出る白い樹液（白龍）に呪力が認められていたことも指摘し、人々が「旺盛な繁殖力と白龍の持つ象徴性から、除病（辟邪）と再生（稲穂）の二つの呪力を認めていた」とする（渡邉　ニ〇〇七　ニ〇ニ〜ニ〇三）。

9 ちょっと感覚は自治体史等の資料のなかにも数多く語られている。たとえば茨城県総和町では「ヌルデは木肌がきれいであり、切り口は根も出ているよう、どこでもあるがあまり用途がなかったため箸やマユウマを穫るのに使われた」（総和町史編さん委員会 二〇〇五　三六六）という。香川県白鳥町ではプシの木（ヌルデ）について次のようにいう。

「プシの木をなぞダイコンに使うかは、さだかではない。考えると、この地域は、木炭の産地で、その山林の雑木はほとんど木炭原料として焼かれるのであるがこのプシの木は、木炭としての利用価値が少ないことと、プシの木幹は他の雑木の幹肌と比べてややう黒色であるため削りかけを行なった場合、削りかけの条がすっきりとうそう黒色の肌色に条の白色がうき出されるからこのプシの木を選ぶことになったものと考えられる」（白鳥町史編纂委員会 一九八五　一五〇八）（下線部引用者）

10 花粉分析と珪藻分析による成果が次のようにまとめられている。

「集落の形成とともにナラ類やプシからなる落葉広葉樹林が伐採され、クリの純林が形成された。それに先行して、集落の形成約800年前にすでに周囲のクリ林が形成されていった。満州戦時中後半にはクリ林の縮小とトチノキ林の拡大が同時に起こった。これは、トチノキ利用文化の出現による可能性が高いことが指摘された」（辻ほか編　二〇〇六　三）

11 なかでも強調されているのは農業との関わりである。たとえば一九六〇年代に里山という言葉を再発見し、人と関わりの深い自然として概念づけた四方井綱英は、里山を「農用林」の代替語として捉え、「農家が農業を営むのに必要な物質生産に関係する林」と定義づけてい（四方井　一九九三　七五）。そうした考え方は基本的に現在まで引き継がれているといえ、里山学を提唱する丸山徳次も「農業環境」をキーワードに里山を捉えている（丸山徳次ほか　二〇〇七　五〜一五）。

12 たとえば一九八一年の静岡県御殿場市では「今はこのカツミの木が少なくなってしまい、そのためにこの地の家でも門入道を作る家が少なくなくなったとも聞いた」という（富山　一九八四　四七）。同県の静岡市を含むヌルデについて、一九六九年の時点で「近年、この木も太いものは勿論、木そのものも滅失してしまったと、土地の不道話がある」（中川雄太郎　一九六九　三五）とある。

これらは例外的に、あるいは危険として選択される場面があることから、材としては問題なく利用できることは証明される。

368